

永積昭「東南アジア植民史」、王瑜「東南アジア華僑社会の文化」が、そして翌一九六二（昭和三十七）年には、インドネシア科に西川五郎「熱帯農産事情」が加わってくる。非常勤講師を迎えての多彩な講義開設の初期の姿である。現在の非常勤講師の数と比べて、如何にも今昔の感が深い。

このわれわれが、一九九五（平成七）年の大講座制への改組という学部改革を先取りするかたちで、一九九二（平成四）年合併し、「東南アジア語学科」への拡充改組を実現した。他の学科の一步先をいつていたわけである。

われわれはもちろん東南アジアの隣人として昔から仲がよく、大学紛争後に始まった新入生オリエンションも毎年一緒だった。しかし、共通講義の開設や「東南アジア総合研究」（真保潤一郎ほか）などの試みからさらに踏み出して、一緒に「東南アジア」を作ろうという構想は、元来「インドシナ」のものであった。特にタイ研究者にとつて、「インドシナ」は「仏領インドシナ」を連想させて決して居心地のいい名称でないようだった。こうして、「東南アジア語学科」への拡充改組が、タイ地域研究の田中忠治学生部長の時代に実現を見ることになったのも、あながち偶然ではない。

この東南アジア語学科（一九九二―一九四）の最後の年に第一巻を発行した学科紀要「東京外大東南アジア学」は、一九九八年第四巻（編集・発行者 東京外国語大学東南アジア課程研究室）が出た。ページ数も、一四一ページ、一一一ページ、一六五ページから、二三五ページと飛躍的に増えた。今後も課程紀要として充実発展してゆくだろう。

## 五 語劇覚え書

「語劇便利帳」一九九八年版（外語祭実行委員会発行）の年表「語劇の歴史」を読むと、一九〇八（明治四十二）

年の項に「外語の語劇に衣装、メーカーアップなど行き過ぎがあるとして文部大臣小松原英太郎によって禁止される。この年、総理大臣桂太郎、俳優市川左團次もみにき、との記録がある」とある。

一九〇八年といえば、馬來語速成科が誕生した年である。語劇の公演がこれほど大きな社会的インパクトをもちえた時代は今や夢の彼方にしても、この外国語学校以来の伝統の語劇は、今もなお外語祭を特徴づける大きな催しである。

かつて語劇は学科全体が取り組むプロジェクトであった。上級生が演出、主役。下級生は脇役、端役、また大道具係。寄付金集めに回る仕事もあった。一九五九（昭和三十四）年、講堂が出来るまでは、大道具類をトラックに積み込んで会場の中野公会堂や池袋公会堂に運んでいたし、それなりの人員を動員できる態勢が要求された。

今の語劇がかつてのそういう語劇と大きく異なるのは、現在にはほぼ二年生のクラスが担う企画として行われていることである。かつての学科主体の語劇がこう変わったのは、大学紛争による中断後、語劇が復活し始めたとき、学科の企画する語劇とクラス有志による語劇が区別され、前者が反対派の全共闘諸君の粉碎の対象になるという事情があったことによる。

こういう流れの中では、少人数のクラスは断然不利である。東南アジア語学科のフィリピン、ラオス、カンボジアが参加し始めた一九九四（平成六）年以降をとると、八専攻語がどこも欠けずに揃った年は一九九五年の一年のみ。比較により大きな学生数を持つインドネシア、タイ、ベトナムは別として、少人数の専攻語ではどうしても参加できない年が出てしまう。一九九八年は残念ながらラオス語が不参加に終わった。

こうしたなかでユニークなのは、フィリピン語専攻である。ここではフィリピン研究室の強力なサポートもあって「外大フィリピン民族舞踊団」が生まれており、外語祭での公演に止まらず、フィリピン大学に招かれて好評を博す

るなど、日比文化交流の大きな活動を見せている。また同年のマレーシア語専攻は、二年生があきらめた後、上級生有志が急遽名乗りを挙げ、超特急の準備で見事に上演にまで漕ぎ着けて、さすがにキャリアが違うと印象づけた。タイ語専攻のケースを付け加えれば、ここでは例年二回の語劇合宿が行われており、上級生・卒業生もこの合宿には参加して後輩をバックアップしている。毎年の公演を実現しているところはとここで、それ相応の態勢があることが分かる。

われわれは国策の最前線だった。その時代により、文明開化の最前線に、大東亜共栄圏の最前線に、高度経済成長の最前線に先兵を送り出してきた。しばしば泥縄であったのは最前線だったからだ。問題は、今もわれわれが最前線にいるか否か、だろう。東京外国語大学外国語学部東南アジア課程八専攻語の歴史をたどり終えての感慨である。

## 附 オランダ語

### オランダ語教育のスタート

本学の馬來語学科がそれまでの速成科から本科に昇格したのは一九一一（明治四十四）年のことであった。このことは日本人の東南アジアへの進出がいよいよ本格化し、その性格も大きく変わりつつあったことを示している。従来は「からゆきさん」とか「娘子軍」といわれた婦女子が流れ流れて行く果てが東南アジアであったとすると、日露戦争後は商人や企業家の経済的進出が次第に目立つようになっていった。一九〇九（明治四十二）年にはバタヴィア（現ジャカルタ）に日本領事館が開設され、一九一二（明治四十五）年には三井物産がスラバヤ（ジャワ）に進出している。そしてその翌年の一九一三（大正二）年には南洋郵船会社が日本とジャワの間に直通の航路を開設している。